



197cm!! 元Vリーグ選手の中島さん



一番背の高い人は?

い きなり難問である。学生であれば、学校に問合せれば何とかなるが、今回は佐賀市在住の老若男女問わず、全ての世代の中で一番身長の高い人を見つけなければいけない。市民全員の身長をとっているところなんてないだろうし、どうやって探せばいいのか…。途方に暮れたときには、手当たり次第聞くしかない。身長が高いといえばバレーボールかバスケットボール。というわけで各競技の関係者にリサーチしたところ、県バレーボール協会から有力な情報をゲットした。197センチの元Vリーグ選手が現役に引退して実家の佐賀市に戻っているという。

予定時間よりも早く着いてしまいい待ち合わせの場所で待っていると、離れた駐

車場から歩いてくる男性に気がついた。デカイ。目印がなくても一発で分かる。男性の名前は中島悠樹さん。自動販売機よりも大きい197センチだ。

中島さんは佐賀市出身。小学校時代すでに170センチ後半だった中島さんは中学校で友人に誘われバレー部に。佐賀商業高校を卒業後、近畿大学を経て、2009年にVリーグの大分三好ヴァイセアドラーに入団した。ミドルブロッカーとして活躍、全日本代表登録メンバーに選ばれたこともある。昨年、現役に引退。現在は介護福祉士の資格を取得し、佐賀市内の介護施設で働いている。

「今までは周りにバレー選手がいたのであまり意識していませんでしたが、佐賀に帰ってきて街を歩くと振り返られることが多いです。子どもから、すげえーとか、でけえーとか声に出してびっくりされます」と笑う中島さん。背が高いことでいろんな苦労があるようだ。「まず着るものが選べません。似合う似合わないではなく、サイズが合うものを買うしかない。丈は合ってもウエストはブカブカだったりします。靴のサイズも30センチなのでネットで購入しています。職場で使うジャージはサイズがないので、バレー選手時代のものを使っています。移動も窮屈だし、しよっちゅう頭を打つし、不便なことが多いです。」

逆に身長が高くて良かったことは？「やはりバレーボールの国内最高レベルを体験できたことです。努力しても身長の上にはね返される選手も多いですから。足場なしで電球を代えられたり、目立つので待ち合わせが楽だったり。職場で、おじいちゃんやおばあちゃんたちに可愛がってもらえるのも嬉しいですね」と中島さん。

最後に中島さんに質問。佐賀市で中島さんより背の高い人に会ったことはありますか？「街なかで背が高い人に出会うと気になります。佐賀市で自分より身長が上の人と会ったことはないですね。バレー界でも大きい方でしたから。」

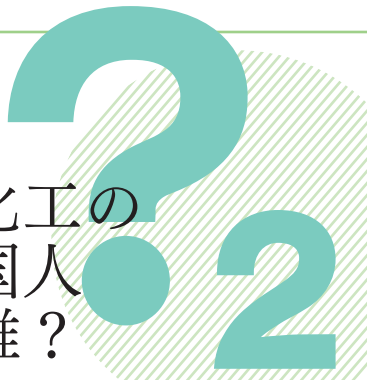
「自分は身長197センチ以上である。またはそういう人を知っているという方はぜひモチモチさが編集部まで連絡下さい!!」

特集 佐賀市のなぞ調査隊

- Q1 一番背の高いひとは
- Q2 理研農産化工の看板の外国人シェフは誰
- Q3 北から南まで車でどれくらいかかるの
- Q4 一番古い企業は
- Q5 ラブリーな不動産看板
- Q6 なぜヨーガンレールの路面店が
- Q7 バスの終点「麻那古」ってどこ?



理研農産化工の 看板の外国人 シェフは誰？



確かにアレは気になる。佐賀人なら誰もが見たことがあるはずの理研農産化工の看板。「サラダ油・小麦粉といえば、やっぱり理研」というキャッチコピーとともに、海老フライと腕組みしているコック服姿の外国人。JR佐賀駅前の交差点でも、柔和な笑顔で街を見守っている。看板が設置された建物の1階にある、つけそば屋「四瀬」の大将に聞いてみたところ、「ロバート・デ・ニエロじやなかと」とのこと。いきなり大物が出てきたが、本当なのだろうか？早速、理研農産化工を訪ねた。

「デ・ニエロではないですね。そういう問合せは何件もあったようですが、ニューヨークの有名シェフだと聞いています」と広報担当者さん。理研農産化工

NYの有名レストランのシェフ

は1917年創業の精油・製粉メーカー。1948年に佐賀駅東に新製粉工場を建設した際、技術面で指導を受けていた理化学研究所から名前をもらい「理研農産化工株式会社」を新社名とした。現在では佐賀で製粉工場、福岡で精油工場を操業している。精油業界ではシェア国内第4位という全国規模の企業だ。

問題の看板は創業90周年の取り組みとして、家庭用食用油の普及を目的に設置を開始。現在、佐賀や福岡、長崎、東京に16カ所あるという。さて、外国人シェフのもっと詳しい情報だが、「それ以上はちょっと分かりません。この広告戦略は弊社の会長が陣頭指揮を取っている。会長なら、もっと情報が出てくるかもしれません」。



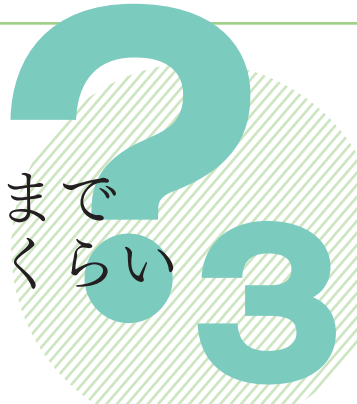
理研農産化工株式会社 鶴池直之会長

後日、理研農産化工株式会社・鶴池直之会長を訪ねた。「この看板は関西のデザイナーに依頼して作りました。『ピーターパン』というパンや、天神地下街にあった洋菓子店『ポワール』などの事業をしていた系列子会社キムラヤパンの仕事からですから、40年くらいの付き合いになります」と鶴池会長。当時、同社の食用油部門では、売り上げのほとんどを業務用が占めていた。鶴池会長は「家庭用商品の比率を伸ばしたいと思い、これまで手を出さなかった広告にチャレンジすることにしました。福岡の天神に設置した看板は、当時、毎月の家賃が私の月給よりも高かったなあ。今では東京モノレール沿線にも看板を設置しています。九州の人に、理研農産化工も頑張っていると思って頂ければ嬉しいです」と振り返る。現在は家庭用が食用油の3割を占めるまでになったという。まさに看板効果だ。

「看板デザインは3案ほどあった中から選びました。キャッチコピーも写真もそのデザイナーさんの提案です。コック帽の部分が看板からはみ出すのも特徴。枠に納めるよりもコストはかかりますが、看板から飛び出したようなダイナミックな印象を与えます」。最後に外国人シェフについて、もっと詳しい情報がないか尋ねた。「担当してくれたデザイナーはアメリカでの生活が長く、そのコネクションを使って呼び寄せたと思います。当時はアメリカから日本に料理指導に来るシェフも多かった。そういうタイミングで写真撮影をしたのかもしれない。具体的な店名や名前は分からないのですが、この看板の男性からは、美味しい料理を作り続ける本物の雰囲気を感じます。デ・ニエロさんと間違うのも仕方ないかもしれませんね」と鶴池会長は笑った。



サラダ油・小麦粉といえば、 やっぱり理研



北から南まで 車でどれくらい かかるの

2007年に4町村が合併し南北に長くなった佐賀市。そもそも佐賀市の最北端と最南端はどこだろうか。自動車で行けることが条件なので、正確には一番北と一番南にある車道を探すことになる。最北端の車道はどこだろう。当初は三瀬トンネルかと思っていたが、地図をじっくり見るともつと北に道路がある。富士と前原

を結ぶ県道12号線から1本入った県境の道路だ。住所は佐賀市富士町上無津呂。南は佐賀空港よりも、筑後川の中州にある佐賀市川副町大詫間の方がわずかに南に位置していた。上無津呂から大詫間まで、果たして何分かかかるのか。実際にドライブしてみた。

まずは最北端・上無津呂へ。雷山登山道の標識がある大きなカーブからスタートする。カーナビに到着地点を入力。最南端までの距離は52.6キロと出た。カーナビの指示どおりに走行。もちろん法定速度は絶対遵守だ。650メートルほど走行すると県道12号につながる。左折し道なりに山林を下っていく。しばらくすると集落が見えて来て「ようこそ佐賀へ」の看板が現れる。ずっと佐賀なんだ

1時間19分47秒

が……。その後、嘉瀬川ダム上流から古湯、川上峠を通り、旧佐賀市に入る。思ったほどの混雑はなくスムーズに市街地を抜け川副町に入る。さらに南下する。大きな橋を渡り大詫間へ。集落の狭い道路を通り抜けると、先に広がるのは干拓地。まっすぐな道をしばらく行くと目的地である堤防に着いた。要した時間は1時間19分47秒。車を降りると夕焼け空を佐賀空港への最終便が横切っていた。脊振から有明海まで。佐賀市の大きさを感じさせる旅だった。





ラブリーな 不動産看板



青地にカラフルな花や動物たちが手描きされたファンシーな不動産さんの看板。街を通るとなんとなく目に飛び込んでくる。早速、看板に書かれた番号に電話。杉谷不動産へと向かった。

「看板屋さんに頼むと高いので自分で作っています。最初は字だけだったんですが、目立たないのでカラフルな花や動物を加えました。手描きだと、いろいろな人の目に飛び込むようです。学生時代は図画工作が苦手だったんですが、必要に迫られもう何十年も作り続けています」と教えてくれたのは杉谷博子さん。2年前に息子の能央さんに会社を譲るまで、ずっと社長を務めてきた。

お母さんが手描きで制作



独特の質感が興味深い不動産看板。制作はお店を閉めた後に行われる。プラスチック系の透明板に青い下地を塗る。乾かした後、絵と文字を拡大コピーして下書きする。いろんな絵画展のチラシや雑誌のデザインも参考に。1枚を完成させるのに数日かかることもあるという。

「今は掲示しているのは20枚くらい。これまでに100枚くらい作ったんじゃないでしょうか」と能央さん。「初めはバラなどの花が中心だったんですが、孫が生まれてからは、子ども向けのキャラクターっぽい動物も描くようになりました」と博子さん。ちなみに夫・正昭さんの趣味はカメラで、昨年はお孫さんの写真で某新聞社の年間優秀賞を獲得した。そんな身の回りのことを大切に作る姿勢があるからこそ、杉谷不動産のファンシーな看板は風景とケンカすることなく絶妙な存在感を漂わせているのだろう。

特集 佐賀市のなぞ調査隊



1626年開業の野中烏犀丸

一番古い企業は



佐賀市内で最も歴史のある会社はどこなのか。県内の創業100年以上の企業が集まった団体「佐賀老舗の会」の加盟社から調べる。一番古いのは佐賀市材木町にある野中烏犀丸で1626年。今から約400年前だ(次点は丸房露で有名な鶴屋で1639年創業)。ウサイエン製薬株式会社代表取締役で薬学博士の野中源一郎さんに話を聞いた。

製造の許可が下りる。烏犀丸とは徳川家康の秘薬として有名な漢方滋養強壯剤。家康は自ら製造し、江戸時代としては異例の長寿である73歳まで生きた。当時、諸国を巡る薬売りは幕府のスパイであると考えられており、佐賀藩は藩外からの薬行商を禁じることになった。しかし名薬烏犀丸がないのは困る。そこで忠兵衛に名字帯刀を許し製造許可を与えることにした。「江戸時代はいろんな藩で作っていた烏犀丸ですが、今では弊社だけが製造しています」と野中さんは語る。

ウサイエン製薬株式会社 野中源一郎 代表取締役

な甘味に驚かされる。蜂蜜をたっぷり使っているからだという。次第に漢方薬の苦みが口に広がるが、最後はスーッと清涼感に満たされる。頭がシャープになる感じだ。「虚弱体質の改善や体の疲労回復に効果があります。農家の方は、田植えや稲刈りの1カ月前から毎日服用して厳しい仕事に備えるそうです。カゼをひきやすい人も、寒くなる前に毎日舐めておけば、体調を崩さずに冬を乗り切ることができます」と効能を語る。かつて佐賀の中学校運動部では大きな大会前に生徒に烏犀丸を舐めさせるところも多かったという。「九州一周駅伝の県チームにも提供していました。競走馬に服用させるため、関係者が購入することも多かったようです。売り上げの4割ほどが競馬関係だった時代もありました」と振り返る。戦後日本を代表する東洋思想家・故安岡正篤も大ファンの一人。長らく愛用していたという。野中烏犀丸が約400年続いた理由は何だろうか。「まず商品力に間違いがないこと。漢方薬は数千年もの時間と、人体実験を重ねて作られたものだから、効果は間違いありません。また家訓として、金融商品に手を出さず、子孫に美田を残さず、質素倹約、の3つを守るように言い伝えられています」。野中さんは今でも毎朝茶がゆを食べるという。まさに典型的佐賀人だ。「烏犀丸を板チョコ状にしてみました」と試したことがあります。薬事法の関係で断念しましたが」と笑う野中さん。

現在、ウサイエン製薬では烏犀丸以外にも健康食品を発売している。脳や眼、免疫を助ける機能があるという。常に今の時代を見据え、事業の柱を磨いていく。それも老舗の条件の一つだ。

6

なぜ ヨーガンレールの 路面店が

佐賀で暮らしていたら当たり前の存在だが、他の土地の人々からすると違和感がある。多くは方言や風習などその土地にしかないものだが、逆に都会にあるべきものが地方にもあると驚かれるケースもある。今回の疑問もその一つ。なぜ佐賀にヨーガンレールの路面店があるのか。東京や福岡などから来た数人から質問された経験がある。

「ヨーガンレール」とはポーランド生まれのドイツ人男性、ヨーガン・レールが1972年に日本で立ち上げたファッションブランド。天然素材を活かした手仕事の布で作られる、ゆったりとしたシルエットの服は幅広い世代の女性に愛されている。

同佐賀店は中央大通りにある。鮮やかな赤のワンピースが飾られたショーウィンドウに、大きなデイゴの木陰を落としている。開け放たれた扉からは、一番奥に水墨画のような苔むした貫録十分の巨木が見える。常連の80代女性は「奥に見える巨木に魅かれて店内

雰囲気とお客さんの支持を考慮し直営に



に入ってから、20年ほど通っています。ヨーガンレールの服は素材もシルエットも自然な雰囲気でお気に入りです」と話す。同店は10年以上、鼻根にしてくれるお客さんが多いという。店長の宮原尚子さんは「素材にこだわる洋服好きなお客さまが多いですね。見せるためではなく、自分のための服というイメージ。流行に左右されず長く愛していただいています。以前、女優の加藤治子さんが仕事で佐賀を訪れた際に、ふらっと寄って行かれたこともあり。何でヨーガンレールが佐賀にあるの、と尋ねられました」と教えてくれた。

同店は地元の洋服屋さんがフランチャイズとして経営していたが、数年前に撤退。ヨーガンレール本社の担当者は「当時は閉店という話も出ました。しかし、お店を支持してくださるお客さまが多く、お店の雰囲気が自然を大事にするブランドコンセプトと合致しており、デザイナーのヨーガン本人もお店を気に入っていました。なんとか経営を継続できないかと考え、本社が直営することに決めました。お客さんの支持とスタッフの頑張り、継続可能な数字で推移しています」と打ち明ける。ブランドコンセプトとお店の環境を愛する人たちがこの街にいて、ブランドもその人々の思いを大切に。ヨーガンレールの直営店の中で、おそらく最も人口が少ない自治体にあるこの店は、そんな小さな「奇跡」を見せてくれている。「梅雨時期になるとデイゴの花がはらはりと落ちて、店の前が鮮やかな赤に染まります。毎日掃除するのは大変ですが、一番好きな季節です」と宮原店長は笑った。

7

バスの終点 「麻那古」って どこ？



茶色い屋根が印象的な静かな集落

市内を走るバスの行き先表示にある「麻那古」ってどんなところだろうか。実際にバスに乗り確かめてみた。

「麻那古」行きの昭和バスは平日4便、土日祝3便出ている。どの便も午後からの出発。今回は一番早い13時台に乗車することにす。ちなみに最終便は19時台だ。

辻の堂始発のバスは約3分遅れで佐賀駅バスセンターに到着。乗り込むと運転手さんが行き先を告げる。麻那古は「まなこ」じゃなくて「まなご」なんだ。乗客はお年寄りを中心に計6人。バスはほとんどの停留所に停車することなく快調に市街地を抜けていく。川上峡の赤い橋を渡ったところで車内アナウンス。「ここからはフリー降車区間です」。運転手さんにお願いと停留所以外でも降車することが可能なのだという。普段バスに乗ら

ないので新鮮だ。

嘉瀬川の左岸を登っていく。バスから見下ろす清流は涼やかで気持ち良い。熊の川を経て古湯で全員降りたが、お爺さんが乗車してくる。二人つきり。何気なく見ていると右耳の穴を銀色のものが、嘉瀬川ダムサイトを越えてしばらくしたところで、お爺さんは降車ボタンを押す。おもむろに右耳から銀色の物体を取り出し料金箱に入れる。100円玉だったのか。いよいよここから一人きりである。バスは新緑の木立の中を走る。上無津呂の吉村家住宅の前でUターンした後、来た道をちょっと戻り、終点の麻那古に到着。1時間20分くらいの旅だった。

印象的なのは茶色の屋根。島根県で作られる石州瓦だ。表面に釉薬が掛っているため水を通さない。凍っても割れないため、九州

でも山間部ではたまに見かける。バス停近くに小さな商店があったので、お茶を買いに行く。声を掛けても誰も出てこない。しばらくして、外の畑から野良作業を中断しておばあさんがやってきた。店を見まわすと「マナゴ」、「肥前正宗」と呉須で書かれた徳利があった。戦前、この商店は造り酒屋をしており、「肥前正宗」はそのブランド名だという。おばあさんがお嫁に来た64年前は90戸あった集落も今は58戸ほどに。おばあさんは「商売というより、ボケ防止のためにやっている」と笑った。

麻那古集落には佐賀と唐津を結ぶ国道323号が走っており、交通量は思ったよりも多い。しかし旧道を行くと、小さな川沿いに静かな集落が広がっている。その中心にあるのが春日神社。793年に勧請された歴史ある社で、現在地には1564年に移ったという。境内にあるイチヨウの巨木の周りは、奇麗に掃き清められている。ユモラスな仕草の狛犬が乗った灯籠を眺めながら、拜殿に行くとき天井にたくさんの絵が描かれている。相撲や黒い熊など、なかなか面白い。

しばらく散策してバス停に戻る。ここで問題発生。なんと麻那古から佐賀市内行きのバスは午前中だけしかないのだ。スマホで調べたところ、ここから2キロちょっと歩いて北山中原という停留所まで戻るとバスが出てくるようだ。国道でも帰れるが、せつかくなの山道に行く。路面には黄色くなった笹の葉がうっすら積もっている。こころなしか速足になり30分ほどで目的地に到着。バスの時間まで1時間、北山饅頭を食べながら待つことにした。